TAKE FREE

# BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine

奥多摩町公式タブロイド

## 奥多摩むかしロマン

About Your Okutama Memory

#15

ISSUE Fifteen

BLUE+GREEN JOURNAL | About Your Okutama Memory

# ABOUT YOUR OKUTAMA MEMORY

## 奥多摩むかしロマン

あの時代、あの瞬間。奥多摩の記憶をたずね歩いて。

これまで奥多摩がたどった壮大な歴史を知ると、
途端にこの地域への興味が倍加する。
数千年前の暮らしの痕跡や、ダム建設により消失した村の記憶、
そして、かつて賑わった多数の娯楽施設や温泉・・・。
知られざる奥多摩の過去を訪ね歩き、
この土地に散らばる［記録］と［記憶］に触れる旅へ。

Old Stories, Tales, History, Nostalgia...

1938年、建設を着工した小河内ダム。
戦時中の工事中断を経て、1957年にダムが完成した。現在の湖底には、かつて写真のような村が存在していた。
写真提供:杉田一治

堀口豊さん
【海沢在住】

MUKASHI-ROMAN STORY

## 01 縄文ロマン

奥多摩各地で出土する縄文式の石器や土器。
海沢在住の堀口豊さんはこうした縄文の痕跡に魅せられ、
長年、歴史ロマンを愉しんでいるという。

PROFILE 1951年奥多摩生まれ。高校卒業後、自動車会社や介護施設などに勤務。定年後は海沢で縄文の土器や石器探し、バイクの趣味などを楽しむ。

# I like to search Jomon stone tools!

Text/Naoya Aoki

### 縄文の痕跡を気ままに探す、優雅な趣味

「奥多摩でも、縄文時代のモノはいっぱい見つかるんですよ」

自身で集めた石器の数々を前に愉しげに語る堀口豊さん。その興味の端緒は、小学生の頃にさかのぼるという。

「父が、新しく購入した土地を整備してたんですね。すると陶片が出てきた。こりゃ、一昔前の茶碗じゃないか、なんて父は言う。私も、そうと信じて一生懸命集めてたんです。ところが小学3年生の時に、専門家の先生に見せる機会があってね。なんと、縄文土器だと判明した」

それから土器や石器探しが堀口さんの人生の一部となった。70歳を超える現在まで、60年以上続く趣味だ。その観察眼はまるで「縄文探知機」。素人目には一見何もないように見える地面から、たちどころに土器や石器を発見する。いわく、耕した畑に雨が降ったあとが、掘り返されたものがあらわになるがゆえに、絶好の採集スポットになるのだそう。

「でも収集は主目的じゃないんですよ。土も一切掘らない。表面採集です。バイクに乗って奥多摩やその周辺に出かけて、目に見える範囲で探すだけ。それが面白いんだ」

見つけ出した遺物の情報から、過去を想像することも楽しみのひとつ。例えば、奥多摩のあちこちで見つかる土器には、奥多摩の土が使われていない。そして同じく黒曜石や翡翠（ひすい）も採集できるが、これも奥多摩では採れない。堀口さんは考える。奥多摩は狩りの場だったという説があるが、実は交易の中心地だったのではないか。周辺の人々が、交換したい物品を土器に入れて集まってきた。そのために他の地域のものが混在して出土するのではないか。そんな見立てである。すると一般的に想像されているような狩猟採集で原始的な縄文人の暮らしとは違った姿が浮かび上がってくる。

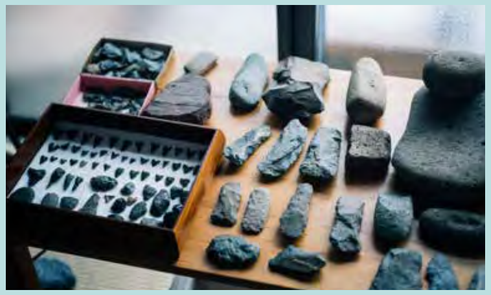
「自分なりにいろいろと推察するんです。想像するのは自由だし、否定できる人だっていないんだから。座ってジュース飲みながらね、土器を見つめて、土地を眺めて、あそこには水場があったのかな、とかあれやこれや考えるのはものすごく楽しいですよ。気兼ねなくひとりでやれるしね」

そんな堀口さんは、縄文より後の時代にはほとんど興味がない、という。

「だって、弥生時代からこっちは、外国とも交易をしていた証拠だって既にあるから。改めて交易を示す物品が出てきたって当然でしょう。それより、謎に満ちた縄文時代がいいですね」

現代から遥か遠い人々の足跡にこそロマンを感じる堀口さん。「縄文時代の調査」というと、つい大掛かりな発掘などを想像するが、彼が行うのはもっと軽やかな愉しみだ。バイクで山道を駆け抜け、気になった場所に降り立ち、縄文の暮らしの断片を見つけ、ありし日の姿を想像し、味わうという遊び。人類史の序章に想いを馳せる堀口さんの目は、最初の陶片を拾い上げた小学生の時と変わらず、今も好奇心に満ちている。

「縄文時代の石器から、数千年前の奥多摩に思いを馳せて」



長年の表面採集によって得た、縄文式石器のコレクション。奥多摩にいながらにしてこれだけの貴重な石器を拾えるという。1万年以上も昔の奥多摩人がこうした石を削り、道具に仕立てていたのだと思うと、なんだかゾクゾクする。





### ジグソーパズルのように言葉をつなげて

「旅行会社の添乗員になりたくて大学で歴史を学んだんですが、そこで古文書を読む面白さに目覚めてしまって」

奥多摩に生まれたものの、当初は別の場所で働くことを考えていたという川崎さん。ところが古文書の魅力にハマったことで、奥多摩の歴史を研究するべく学芸員として地元で働く道を選ぶことになる。

「大学の教授から古文書の読み方を習ったんです。教授は、事前に参考文献を読んだり、他人の意見を聞いたりせず、いきなり古文書を読めと。まずは自分で何度も何度も古い文章を読んで、考え、推測して、結論を出すという方法が面白いなって。もともとジグソーパズルが好きだったんですけど古文書を読む行為もちょっとパズルに似てるんですよね」

とはいえ、数百年も昔の文書は文字がかすれていたり、読みづらい漢字も連続する。読み解くのは相当の苦労があると察するが川崎さんはそのハードルをどう乗り越えているのだろう。

「漢字にはへんとつくりがあるでしょう。どっちかが判読できたらそこから推理するんです。たとえば金へんなら金へんの漢字をくずし字の辞典からすべて見てみて、これだと思うものを探し出す。文章のつながりも考え合わせながら。そうやってひとつひとつの文字の意味を理解していくと文章がつながるんです」

日々、向き合うのは奥多摩の名家や一般家庭に残されている古文書。代々、古い文書を残す家も多いそうで、ざっと見積もっても1万通以上の文書が奥多摩には残されていると川崎さんは話す。扱う文書は江戸時代、明治時代、大正時代、近代まで幅広い。

「村の役人だと公文書のような雰囲気なんですけど、個人の日記や俳句なども残されていて、そのような文書からはより深く庶民の暮らしが見えてくるんです。たとえば奥多摩のとある村に住んでいた一般の方がお祭りで酔っ払いすぎて喧嘩して、お寺のお堂を破壊したなんていう記述もあってちょっと笑えますし、この土地における数百年前の営みがそのように知れるなんて楽しいじゃないですか」

江戸時代から明治時代にかけての古文書には郷土芸能や博打、旅の話も登場するとか。どちらも庶民の愉しみがうかがえる話題で、当時を想像すると実にいろいろなことが見えてくる。

「郷土芸能がさかんだったということは人がそれなりに住んでいたという事実につながっていく。奥多摩は貧しい土地だったのかもしれませんが、人々の日々の愉しみを文書から読んでいくと、心は決して貧しくなかったんだろうなと私は想像するんです」

# I've been into ancient document!

「数百年前の〈暮らし〉を文字から読み解く、愉しみ」

パッと見ると判読が難しい文字の羅列だが、丹念にひとつひとつの漢字を見ていくと当時の暮らしが浮かび上がってくる。

江戸時代に使用された宗門人別帳。住民の情報がまとめられた公文書で戸籍の役割も果たした。これで、400年ほど昔の奥多摩に暮らしていた人物の名前や年齢がわかるのだ。

川崎渚さん
【小丹波在住】

MUKASHI-ROMAN STORY

## 02 古文書ロマン

奥多摩には古くから伝わる古文書が実はたくさん存在する。
川崎渚さんは、そんな古文書から昔の暮らしを読み解く仕事に没頭している。

PROFILE 明治時代の頃から続く、奥多摩・海沢の家に生まれる。現在は奥多摩町教育委員会に所属し、古文書研究や文化財の保全に力を注ぐ。

INFO 川崎さんが所属する「奥多摩古文書研究会」および、「奥多摩郷土研究会」のメンバーを絶賛募集中。問い合わせは、TEL0428-86-2731（水と緑のふれあい館／川崎宛）まで。

大先輩たちが語る、奥多摩のかつての様子

# omoide-ippai 想い出いっぱい

## ── 奥多摩の記憶をひもといて ──

昭和の始め頃には、林業、ダム建設、石灰石採掘などに従事する大勢の人々が暮らす場所でもあった奥多摩。
当時の様子を知る地元の大先輩たちに懐かしき、奥多摩の想い出を語ってもらった。

Text/Naoya Aoki

大舘眞（おおだて まこと）さん | 1941年生まれ 日原在住

### 働いた子供時代、楽しみにした映画

大舘という苗字は、日原の一族です。記録によればおそらく戦国時代ごろに埼玉の方から移り住んだようで。うちの父は、炭焼きとか、箸を作る仕事をしていました。あとは材木屋ね。山で切った木を川に流して運ぶんですが、水をせきとめてから、ドーッと一気に流すんですよ。鉄砲出しっていう。どこも貧しかったから、子供も働いてましたよ。平日は山で薪拾い。休みの日も中学の同級生と一緒に、50kg近い炭を背負ってね、片道10km運ぶんですよ。あとは鉱山の表土を運んで、崖から落とす仕事なんかもあったよ。今考えると命懸けだよね。だけど稼いだお金は生活費になるんです。楽しみと言ったら、映画はよく観ました。小津安二郎や、黒澤明。青梅に行けば3つも映画館があったし、日原でもね、集会所に芝居や映画がよく来たんですよ。長くは続かなかったけど奥多摩工業にもタダで映画を見られるホールがあってね。パチンコ屋も2軒、米屋、魚の干物屋、豆腐屋、タバコ屋、飲み屋、ラーメン屋もあった。昭和40年代に入ってからはどんどん人が減ってしまって。今でも日原に住んでいる人たちは、みんな昔からの仲間みたいなものです。気心知れていて、穏やかに過ごしていますよ。

1952年の氷川町立氷川中学校卒業記念アルバムから、大舘さんの写った写真を見せてもらった。

1940年代、岡部さんのお兄さんが写った写真を見せてもらう。祭りの時だろうか。

### ダムに沈む小河内の記憶

小河内は谷底にある村でね。ところどころ平地で、そこに人家がある。あとは学校や役場が建ってました。近所に駄菓子屋があって、5厘で飴玉買ったような記憶がかすかにあるなぁ。小さい頃はヒモで結ぶ着物を着て、パンツなんか履かないんですよ。親兄弟と爺さん婆さんで、一緒に暮らしてました。夏になると川が綺麗で、よく遊びましたよ。カジカやヤマメを獲って、囲炉裏の上で串焼きにして食べるんだ。脂がのってて、うまかったなぁ。当時は小河内だけでも3,000人はいました。中学の同級生も80人いてね。小河内がダムになる、という話になってからはどんどん人が移転していきました。うちはなかなか未練がましく動かなかったんだけど、いよいよ引っ越しというときには、家を解体する様子をそばで見てましたね。藁葺きの屋根ってのは、囲炉裏のけむりで燻されて非常に硬いんですよ。大人が苦労しながら壊してたな。まぁ、親の代はいろいろと複雑な思いもあったんだろうけどね。子供だった私はもう、諦めちゃってましたよ。完成した当初は、家があったところを見にいったりもしましたけど。いま奥多摩湖を見ても、寂しいという思いは、そんなにないかもしれないなぁ。

岡部義重さん | 1937年生まれ 川井在住

盛田正輝さん | 1941年生まれ 棚沢在住

### 奥多摩には映画館やパチンコ屋もあった

うちは戦争が終わったころに、満州から引き上げてきた家族。最初大阪で、それから転々として結局奥多摩に落ち着いた。一刻も早く稼がなくちゃならなかったところに、奥工（奥多摩工業）で仕事が見つかったんだろうね。小さい頃は、どこへ行くにも歩く時代だよ。住んでいた倉沢（現在は廃村）の寮から日原の小学校まで山道を30分以上毎日登って、吊り橋渡って行きましたよ。買い物は近所の売店。野菜なんかも売っててさ。奥多摩にダムができると決まってからは、日原の飯場がとにかく栄えた。映画館も、酒屋もパチンコ屋もあった。今じゃ考えられないけども。私は氷川の中学校を出て夜学で電気の勉強をして、父と同じ奥工に入りました。そのころに時々乗っていたバスで、当時車掌をしていた母さん（奥様）と知り合って。運転手だった友人に紹介してもらったんだ。一年もしたら結婚して、日原に引っ越した。天祖山から石灰を出すのが機械での自動作業になったもんだから、電気を勉強した私がそこに異動になったんです。それから40年間、定年まで勤めました。栄えていた頃の日原は奥工の人ばかりで、今とは全然違ったよ。最近の奥多摩は、町に人がいなくてちょっと寂しいね。

かつて倉沢地区に住んでいた盛田さん。これは当時、倉沢にあった奥工の社員寮が描かれた図面。





MUKASHI-ROMAN STORY

## 03 民話ロマン

奥多摩の観光にはロマンが足りない！という信念のもと、
この地域に伝わる「民話」に目をつけた荒澤弘さん。
昔話から浮かびあがる、奥多摩の実像とは？

PROFILE 1943年生まれ。日本民話の会会員。
国土緑化機構より森の伝承語り部として「森の名手・名人」に認定。
奥多摩むかし道の企画においても中心的役割を果たす。

荒澤弘さん【氷川在住】

# WHAT OLD STORIES CAN TEACH US!

「奥多摩に継がれる昔話を集め、伝え続ける」

イラスト/「おくたまの昔話/奥多摩民話の会 編」より

### イヌワシが舞う、奥多摩の古き良き、豊かな風景

創業から100年の歴史を持つ旅館「荒澤屋」。三代目主人のひろじいこと荒澤弘さんは、この旅館を「民話」で変革した立役者だ。囲炉裏を囲んでひろじいの民話を聞く。これが荒澤屋に来るゲストの愉しみなのだ。

「ある時、奥多摩には昔話がたくさんあるんだけど、それを形にして後世に残そうという人がいないっていう話を聞いてね。私は昔から純文学、妻は児童文学が好きだったから、夫婦そろって地元の昔話に興味を持ち始めた。その2年後くらいかな、突然、伊藤達也さんっていう若い政治家がうちへやってきて、"21世紀には箱物を土台とした観光は伸びない。これからはソフトウェアの時代だし、奥多摩にはロマンがない"なんて言う。その時、民話と観光が私の中でひとつになって」

その時から弘さんは夫人も含め6人のチームを結成。手分けして民話を集める活動を始めた。「採話といってね、奥多摩を中心に檜原村とか山梨の小菅村、丹波山村なんかにも行って、お年寄りから方言混じりの昔話をひとつひとつ、訪ね歩いて。最終的には絵本にまとめたりもしたんだけど方言混じりの面白さっていうのはやっぱり口頭じゃないと伝わらないんですよ。だからうちの宿でお話をすることにした。それと、民話っていうのは民から生まれた話って書くでしょう。つまり実話がもとになっていてそこに創作が加わっているものがほとんど。だから民話を知ると、昔の情景がおぼろげながら分かっていくるというのも面白い」

弘さんによれば、奥多摩は土地柄もあって獣が出てくるお話が多いとか。

「熊とか猿がお話に出てくることは多い。リスなんかもお話に出てくるけど今はもうあまり見ないですよね。雄大な鳥としてでっかいイヌワシが海沢あたりに出てくるお話もある。猟師が撃ったことでもう見なくなってしまったけど、昔はたまに見かけることがあったんだろうね」

民話から読み解く、はるか昔の地元の情景。その伝承は荒澤屋で今も続く。弘さんの魂が込められたお話から奥多摩の昔を想像するなんて、とびきりロマンティックな時間ではないか。

弘さんが代表を務める奥多摩民話の会の編集による絵本。弘さんの語りとは違った味わいが楽しめる。

弘さんが尽力して作った、氷川と民話の関係性を描いたマップ。

荒澤屋に展示されている、イヌワシの剥製。かつてはこんなに巨大なイヌワシがしばしば奥多摩の空を舞っていたのだ。

樹高はなんと34m。
都内に現存する最大のヒノキ!

東京都指定の天然記念物が
日原で見られる!

# BIG BIG TREE TOLD US THE ANCIENT STORIES!

1000年前の
奥多摩に思いを馳せて

## 倉沢のヒノキ

奥多摩駅から車で約15分。日原街道の急坂をひたすら登ると、この大ヒノキに会うための登山口が見えてくる。街道から山道を徒歩10分ほど。樹高34m、幹回り6.3mの巨木は別名で「千年の大ヒノキ」とも呼ばれ、その威圧感には足がすくむ。実際には樹齢600年ほどと推定されるが、それにしてもこの巨木がはるか昔の室町時代に芽吹いたと想像するだけで、壮大な歴史ロマンに浸ることができる。室町時代といえば京都では応仁の乱が発生し、未曾有の戦乱によって激しく時代が動いた時期。そんな時代からこのヒノキは空を見つめ、山を見つめ、人々を見つめていたのだ。

【棚沢在住】小林奈都美さん

MUKASHI-ROMAN STORY

## 04 石碑ロマン

自然現象を鎮めたり、功労者を称えたり、風光明媚を歌ったり。
その地で過ごした人々の想いをのせ、時代を超えて。
「石碑」に宿るロマンとはどのようなものなのだろう。

PROFILE 1974年奥多摩町生まれ。文化財保護審議会委員。社会教育委員。
古里駅前にて「KUMON」教室を20年以上運営。
子どもの頃から歴史好きで、現在も古文書研究会、奥多摩郷土研究会に所属。

# I'M ADDICTED TO READING STONES!

「石碑から立ち上がる人々の想いと暮らし」

### 日食の供養とは石碑から想像する

奥多摩湖のほとり、水と緑のふれあい館周辺にある「石碑の小径」には、ダムに水没した村の石碑や石仏が並ぶ。その中でも「○」のシンボルが印象的なのが「日食供養塔」だ。

「日食が供養されるなんて、不思議じゃないですか?」

こう語るのは、文化財保護審議会委員の小林奈都美さん。実際、日食を供養するための石碑は、全国的にも珍しいそうだ。それゆえ天文ファンなど、一部のマニアからも注目されている。

文化財を審議する立場にある奈都美さんがこの石碑について知ったのは、記事執筆のために資料をめくっていた時。だが詳しく知ろうにも参考文献が少ないため、まずは日食の発生回数を調べた。すると、石碑に刻まれた寛政11年(1799年)に日食はなかったものの、その前年までの4年間で、奥多摩でも見られる部分日食が3回起きていた。さらに前後15年ほどでは6回見られたという。科学知識も今ほど一般的ではない時代、相次ぐ日食が村の人々に不安を与えたであろうことは想像に難くない。

「詩歌などを刻む他の石碑と比べて、やっぱり特に念が込められている感じはありますよね」

そう、日食供養塔には「念」が刻まれている。それは天を敬う畏れの念か、災厄を忌み嫌う怯えの念か。謎を前に妄想は膨らむが、明確なところを示す記録はない。だが幼少時より歴史を愛し、多様な文物と関わる奈都美さんは、資料が少なければ少ないなりに自由に想像を広げることもまた歴史の魅力のひとつだと言う。

「古いものだって、必ず誰かが携わって作ったもの。そこにあった想いや暮らしがある。それを想像するのが好きなんですよね。ものごとの感じ方って、私も昔の人も、実はそう変わらなかったのかも、と思える時もあったり」

人々の暮らしの痕跡が刻み込まれた石碑。永い時を経て変わらずそこにある石の平面から、昔も変わらず同じ人間が息をしていた、という立体的な存在を夢想することだってできるのだ。

❷徳富蘇峰詩碑

徳富蘇峰が小河内にある「鶴の湯」に来遊した際の印象を、詩として刻む石碑。渓谷美、山岳美、そして水の豊かさが詠まれている。鶴の湯は、江戸時代以降より多くの文人雅客が訪問した温泉だ。もともとこの石碑は湖底の温泉神社の境内にあったが、現在は石碑の小径に置かれる。蘇峰は明治から昭和にかけ幅広く活躍した現熊本県出身のジャーナリストで、彼の碑文が刻まれた石碑は全国各地に残るものの、詩碑の数は少なく、貴重。

❸宝暦箱訴事件大丹波村牢死者供養碑

七郎左衛門、政右衛門、長兵衛の戒名が刻まれる。みな江戸時代に起きた「宝暦箱訴事件」に関わる人物。増税に苦しむ大丹波村から、七郎左衛門が先頭に立って将軍家へ直々の箱訴(目安箱に訴状を投じること)を行なった。しかし訴えは退けられ、箱訴を率いた人々が相次いで投獄。大丹波村出身者も判決前に4名が牢死。百姓一揆の先駆をなすその運動のリーダーを悼む石碑だ。多摩地区の江戸中期の歴史を語る上でも貴重な資料。

❹武州多摩郡小河内温泉之碑

小河内地区の温泉神社にある鳥居の傍らに建つ。表には、江戸後期の儒学者・亀田鵬斎による難解な漢文。その内容は、温泉への賛辞と「鶴の湯」という名の由来。裏側には、酒井抱一の句が刻まれている。亀田鵬斎は晩年、その書が江戸で人気を博した。鵬斎とは生涯の友であった酒井抱一は、絵師、俳人。鵬斎との共作をいくつか残す。鵬斎が書いたとされる石碑は全国に70基以上確認されるが、両者の名がともにあるものは稀少。

❶日食供養塔

奥多摩の歴史に どっぷり浸かるなら

# EXPLORING THE HISTORY OF THIS TOWN

## 「奥多摩 水と緑のふれあい館」で過ごすロマンティックな時間

小河内ダム（奥多摩湖）の目の前にある「奥多摩 水と緑のふれあい館」は歴史ロマンの宝庫。
前身は奥多摩郷土資料館だっただけあって、この土地の歴史を深く知ることのできる常設展示が大充実。
奥多摩のむかしロマンを訪ねるには格好のスポットだ。

縄文土器の文様に目を奪われる。

大正から昭和の時代。一般的な一家団欒の様子が写真で見られる!

400年以上前から続く「原の獅子舞」ではこの獅子頭が使用される。

土器から古文書、農具に郷土芸能まで。歴史の痕跡を一所懸命集めたんです。

奥多摩では採掘できない黒曜石。長野県和田峠、神奈川県箱根畑宿、神津島産のものが運ばれてきたことがわかっている。

小河内の鹿島踊の衣装。毎年9月の第二日曜日、その舞いを小河内神社と奥多摩 水と緑のふれあい館で見られる。

川野車人形は人形芝居の一種。川野（奥多摩）を含めて全国で3座にのみ、その技術が継がれている。

地元住民は意外と見過ごしてしまうかもしれない重要な歴史スポットが「奥多摩 水と緑のふれあい館」だ。この地域で出土した土器や分布、昔の暮らしぶりを再現する展示や当時の道具類、郷土芸能のあらましなどなど、地元への興味を喚起する詳細な展示がズラリと展開されている。まず驚かされるのは出土した土器や遺跡の実態。案内してくれた木宮則徳さんはこう口にした。
「奥多摩町内だけで47の縄文遺跡が見つかっているんです。海沢などでは普通に歩いているだけでポロっと土器が落ちているのを見つけることもさほど珍しくないんですよ」
1万2千年も前の暮らしの道具がまだまだこの地で見つかるなんて。まさしく、奥多摩はロマンの宝庫である。
代々、名家に伝わる古文書のコーナーもとびきり面白い。1842年の古文書によれば、喜八さんが妻の不倫を疑って嫉妬に悩んだストーリーや、ワサビ田の収穫を巡って弥七郎さんと彦四郎さんの間で一悶着あったとか。古文書によって200年も前の奥多摩の日常を知るなんて、なんともワクワクする体験ではないか。
郷土芸能のコーナーでは「川野車人形」や「小河内の鹿島踊」（注）など、国重要無形民俗文化財に指定された芸能について知ることができる。
「人口は減ってしまいましたが今でも町内には20の保存団体があって、そのうち17の団体は祭りや公演などでこうした芸能を披露しているんです。芸能の担い手はどんどん少なくなっていて存続が危ういものもあるので、興味のある住民の方にはぜひ参加してもらいたいですね。こうした団体での活動を通じて素敵な人脈ができたり、知られざる奥多摩の昔話を聞くことができたりと、楽しいことはたくさんありますから」
むかしを知ると、今、目の前に見えている風景がまた少し違って見えてくる。数百年前、この場所で人々は何を想い、どんな暮らしをしていたのだろう。そんな想像をする時間は実に豊かで、ロマンティックなのである。

PROFILE
**木宮則徳さん**

「水と緑のふれあい館」文化財担当の係長を務める。先祖代々、奥多摩に暮らし、祖父や父はワサビづくりや炭焼きを行っていたとか。

「奥多摩 水と緑のふれあい館」
東京都西多摩郡奥多摩町原5
TEL:0428-86-2731
開館時間/9:30-17:00
（水曜休館/水曜が祝日の場合は翌日休館）

注/「鹿島踊」はユネスコの無形文化遺産に登録されている。





MUKASHI-ROMAN STORY

## 05 石灰石ロマン

昭和の始め頃から奥多摩の経済を支えてきた石灰石の採掘事業。今も、この地の誇りであり続ける奥多摩工業の歴史を少しでも知れば、豊富な資源を有する山々の景色が輝いてみえてくるはずだ。

PROFILE 平成7年奥多摩生まれ。祖父は奥多摩工業グループ会社出身。父と自身は現役の社員として奥多摩工業に所属。現在は青梅市在住で、立川オフィスに勤務。

「日本の戦後復興を支えた奥多摩産の石灰石」

原島一也さん
【奥多摩町出身】

# LIMESTONE IS VALUABLE ASSETS!

1943年の氷川停車場（現・奥多摩駅）と駅舎（上左、上右）、石灰石採掘の最盛期、日原にあった社宅（下左）、倉沢の社宅（下右）［すべて奥多摩工業の資料より］

### 石灰石がもたらした、奥多摩の輝かしい繁栄

昭和初期の奥多摩では、林業、ダム工事、石灰石採掘の3本柱がそれぞれ活況を呈し、町には大勢の働き手がひしめきあっていたという話をよく聞く。1937年の創業時（当時は奥多摩電気鉄道株式会社）から石灰石の採掘、加工によって奥多摩に富をもたらしてきた奥多摩工業株式会社は、現在でもこの地の代表的企業だ。日清、日露の両戦争を終えた日本のセメント需要が高まったことで、石灰石採掘の事業が活性化。日原鉱床から石灰石を運ぶために鉄道が敷かれ、この路線が後のJR青梅線、南武線へと発展していくことにもなる。祖父が奥多摩工業グループ会社、父親が奥多摩工業で働き、現在は自身も社員として働く原島一也さん。町と工場の昔ばなしについてこう話す。
「奥多摩湖ができる以前、ちょうど湖底の地域にあった村に祖父は3歳まで住んでいました。祖父からは現在の奥多摩駅周辺には映画館や居酒屋、パチンコ屋などで賑やかだったと聞きました。昔は24時間、2交代で常に石灰石を採掘していたので工場にもたくさんの社員がいましたし、日原にも映画館や立派な社員寮がありました。父も奥多摩工業で夜勤が多かったので私が小さい頃はいつも朝に帰ってきていたという記憶が残っています」
第二次世界大戦終戦から復興需要、高度成長期にかけセメント需要はますます高まり、奥多摩工業の勢いは加速した。
「奥多摩工業の石を積んだトラックが走っていたり、貨車で石が運ばれている様子を見たのが今から20年前、小学校の記憶です。それほど需要があったんでしょうね。あの頃は奥多摩の石が川崎まで運ばれているとは思ってもいませんでした」
現在は、天祖山の鉱床から採掘する石灰石が紙の原料として全国で重宝され、この分野では国内シェアのトップを占める同社。同社は業態を少しずつ変えながら成長を続けている。
長年にわたって、国の成長を支えてきた奥多摩の石灰石。その歴史を知ると、いつも目にする奥多摩工業の工場が、あらためて威風堂々、誇らしげに思えてくる。

現在の工場は、まるで要塞のような独特の景観。

なかなか見ることができない日原鉱床の様子。

奥多摩工業の景観は「映える」ということから、いわゆる「工場萌え」の聖地とも呼ばれている。

曳索（えいさく）鉄道三ツ又線を走るトロッコ。当時の省エネ技術の粋を尽くして建設され現在も稼働している。

## 奥多摩ヒストリー ミニミニ年表

# THE TIMELINE

奥多摩に住んでいても、実はこの土地の歴史をあまり知らないというケースは多いだろう。そこでこのコーナーでは、歴史上の事件、事象を、ダイジェストでまとめてみた。

### 大昔

**紀元前 5000 年〜1000 年**
［縄文時代、奥多摩各地に人々が生活していた］

**958 年**
［平良門が父である平将門の霊像を刻み、多名沢社（現・将門神社）へ安置する］

天慶の乱で敗れた平将門。その一族の一部は奥多摩周辺に隠れ住んだとする説もある。将門自身についても、「深山に入り（将門記）」や「山野に迷う（今昔物語）」といった奥多摩の山々を想起させる記述が残る。

**1492 年**
［原島氏一族が奥多摩を開発する］

武州忍領原島村（現・埼玉県熊谷市）から来た原島丹二郎が日原を、弟の丹三郎が丹三郎（地名）と小丹波を開拓し始めたという記録が残る。

**1598 年**
［徳川家康が奥多摩地方を検地させる］

豊臣秀吉が徳川家康に関東を与えた後、奥多摩周辺地域の村々は徳川氏の支配下に。1598年には徳川氏の旗本・角田将監らによって奥多摩の検地（土地名称、面積、年貢高などの調査）が実施され、この数年後には天領（幕府直轄地）として治政が行われた。

**1647 年**
［日原の箸製造がこの頃、始まる］

江戸時代から明治時代にかけ、日原地域では箸を主として下駄、カンナ、キリの柄など木工業がさかんだった。当時、日原村には37戸あったとされ、名主家の一軒を除いて他は皆、木工を家業としていたようだ。

**1763 年**
［大丹波・箱訴事件の判決が出る］

八代将軍吉宗の時代、庶民の意見を聞く目安箱が置かれ、ここに投書することを箱訴と呼んだ。重税に苦しむ大丹波村の名主・七郎左衛門らが、近郷の19ヶ村をまとめあげて箱訴によって減税運動を展開したが、厳しい咎めにあい入牢されてしまう。この判決が出たのが1763年で、結局、11名の村民が牢死したとされる。

**1890 年**
［棚沢へ隕石が落下する］

この年の12月14日夜、棚沢の坂下に住む清水卯吉さん所有の炭ガマへ、空から金色の閃光が降ってきた。落下後に燃えさかる炎に恍惚を覚えたという卯吉さん。昭和に入り、卯吉さんの相続人が「奥多摩の隕石」として上野科学博物館（現・国立科学博物館）に保管を依頼した。

**1916 年**
［日向和田と氷川の間に乗合馬車の運転が始まる］

**1931 年**
［古里、小河内へ電気が布設される］

**1938 年**
［小河内ダム起工式］

東京西部の多摩川をせき止め、都民の飲料水を確保すべく建設がスタート。第二次世界大戦中には一時中断した後、1957年にダムは竣工した。現在、水道専用の貯水池として日本最大級。

**1945 年 / 第二次世界大戦**
［入川、白丸大沢入、大丹波に空襲］

**1955 年**
［奥多摩町が誕生する］

**1956 年**
［日原に電話が開通する］

**1971 年**
［国鉄・氷川駅が奥多摩駅へ改称される］

1944年、氷川駅として開業したが、1971年に奥多摩駅へと改称。

### 現在

## ＼ 意外と知らない! 奥多摩の歴史 ／

# CHECK POINT!

## チェックポイント

### 弥生時代の奥多摩

町内において縄文式土器の出土は多くあるが、弥生式土器の出土はない。弥生時代は稲作によって生活を支えていたため、水田耕作に適していない奥多摩の山々に人々は住んでいなかったという説もある。

### わさびと清酒の生産

江戸後期に編纂された「武蔵風土記」には海沢地域のワサビに関する記述があることから、奥多摩のワサビ生産は少なくとも200年以上の歴史を持つことになる。また元禄十年（1697年）の書面によれば、白丸村の名主・七兵衛が酒造を行っていたという記述が残されている。この時代には、米の獲れない奥多摩でも酒造が行われていたようだ。

### 郷愁の小河内温泉街

ダム建設によって消えてしまった現在の湖底エリアには温泉「鶴の湯」が存在していた。この温泉の歴史は古く、なんと南北朝時代の1356年〜1361年あたりから利用者がいたようだ。江戸時代には中心部からもアクセスできるということで多くの客で賑わっていたとか。

### 大正時代の人口

大正3年（1914年）、西多摩郡役所発行の「西多摩郡勢一班」には各村の人口が掲載されていて興味深い。これによれば、古里村には3,303名、氷川村には3,716名、小河内村には2,809名が住んでいたとのことで、3村合計では9,828名が在住していたことになる。（2024年2月現在　奥多摩の総人口は4,596名）

### 第二次世界大戦の戦禍

1941年に始まった戦争で、初めて奥多摩地域に直接被害が及んだのは1945年4月24日。この時はB29から投下されたガソリンタンクが山林に落ち、引火したが死傷者はでなかった。その4ヶ月後の8月15日には大丹波が空襲を受け、山や民家が猛烈な火に包まれた記録が残されている。

※本ページの記事は、昭和60年に奥多摩町で発行された「奥多摩町誌」を参考に制作したものです。古い記録には曖昧な記述もあるため、本記事と史実とは若干、異なる可能性があることをご了承ください。

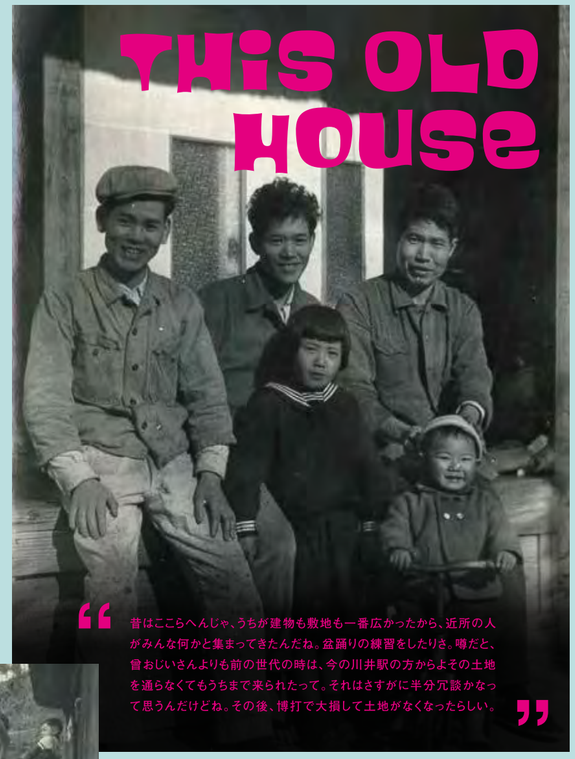




# THIS OLD HOUSE

“茅葺き屋根の頃は、中二階と三階があって、昔は中二階で蚕をやっていたんだよね。三階は昔は博打部屋だったんだぜって聞いてたけど、子どもの頃は真っ暗で怖くてね。入れなかったよ。”

“家の外にお風呂とトイレと物置、そして鶏小屋があった。鶏の卵はもちろん、肉も食べてたね。家の横を流れる沢には、獲ってきた魚を放流してさ。近所の子どもたち相手に、10円で魚釣りやらせて小銭を稼いでて親父に怒られたっけ（笑）”



“昔はここらへんじゃ、うちが建物も敷地も一番広かったから、近所の人がみんな何かと集まってきたんだね。盆踊りの練習をしたりさ。噂だと、曾おじいさんよりも前の世代の時は、今の川井駅の方からよその土地を通らなくてもうちまで来られたって。それはさすがに半分冗談かなって思うんだけどね。その後、博打で大損して土地がなくなったらしい。”

写真右下の男の子が当時2歳頃の木宮茂さん。

昔、『猿飛佐助』っていう映画が家の敷地内で撮影されたことがあってね。まだ1歳か2歳かそこらだったと思うけど、記憶もうっすらある。畑で馬を走らせたり、金棒を持った役者さんに抱っこしてもらって写真撮ったりしてね。なんでうちで撮ったかっていうと、やっぱり家の雰囲気がよかったんじゃないかな。茅葺き屋根が立派だったし、家の外壁も今みたいな感じじゃなくて、板張りだったし。一週間かそこらは撮影でいたんじゃねえかな。

“親父は、顕微鏡なんかのレンズを作る自営業をやっていて。母屋の隣に小さな工場があって、そこに従業員が2〜3人来てたんだ。暗室もあって、この写真は親父が趣味で自分で焼いたものだね。”

俺が子どもの頃は、茅葺き屋根でね。今みたいな天井も張ってなかったから、屋根のところまでずっと囲炉裏の煙が上っていって。その煙に燻されてたから、柱も梁も今でも黒々としているでしょ。神棚もね、雲板なんか全部手で彫刻してあって。それがかっこいいよね。

MUKASHI-ROMAN STORY

# 06 古民家ロマン〈番外編〉

BLUE+GREEN JOURNAL の編集・制作をしている私たち夫婦は、2015 年に奥多摩に移住した。
住まいは、空き家バンクで見つけた古民家。この家にはどんな歴史があったのだろう？

### 家族の歴史が詰まった、古民家に暮らして

今から約10年前。浅草に住んでいた私たち夫婦は、自然豊かな里山での暮らしを求め、東京の西側で物件を探していた。ある日、奥多摩町HP内の空き家バンクリストに気になる物件情報が。売買案件がひたすら並ぶなか唯一の賃貸物件で、しかも憧れの古民家。すぐに問い合わせて内見させてもらうと、空き家になって十数年、部屋中がホコリの層で覆われていたものの、立派な大黒柱と梁、大きな神棚が醸し出す荘厳な雰囲気に心惹かれた。今も住み続けている愛すべき我が家のことだ。JR川井駅から車で約7分。築150〜200年というこの家は、お隣に住む木宮茂さん（67歳）の生家である。古民家の魅力とは趣のある建築のみならず、そこに暮らした人の歴史が染み付いていることだと思う。それを嫌だと感じる人もいるかもしれないが、血が通っている家とでもいうべきか。先人が紡いできた暮らしの気配が残る家には、誰かに見守られているような安心感があるのだ。この家にはどんな人々が暮らし、生きてきたのか……。昔の写真を見せてもらいながらあらためて茂さんに話を聞くと、この家への愛着感がふくふくとさらに増幅していくのを感じた。「使わずに持て余していたけれど壊すのは嫌で。先祖代々の家を大切に住んでくれる人がいればと思っていたからね。こうやって元の形を温存しながら住んでくれるなんてありがたいことだよ」。子どもが産まれたのを機に賃貸契約をやめ、家を安く譲っていただいたのが数年前。茂さんは目を細めて我が家を眺めつつ、そんな嬉しい言葉を紡いだ。大切な家を住み継がせてもらい、こちらの方こそありがたいことだ。時を超え世代を超え、この家に刻まれてきた家族の歴史。その面影に時折思いを馳せながら、自分たち家族の物語をこれからも紡いでいきたいと思う。

茂さん（右）、長男の良太さん（左）、私と娘と一緒に。今後も世代・世帯を超え、大切にされる家になればと思う。

PROFILE
曽田夕紀子
編集者。夫・宇都宮浩とともに編集プロダクション「ミゲル」を運営。BLUE+GREEN JOURNALを制作。2015年5月より奥多摩町大丹波在住。夫、娘、猫たちとともに虫&寒さと共存する古民家生活を満喫中。

写真家親子がみつけた、奥多摩むかし道の素敵ポイント

# LET'S WALK THERE

## 親子で歴史ロマンを感じるウォーキングにトライ

かつては江戸と甲州を結ぶ交易のための道として重要な役割を果たしていた旧青梅街道。
この街道のうち小河内地区と奥多摩駅の間に、全長約10kmの「奥多摩むかし道」がある。
何度歩いても新たな発見があるこのコースへ、写真家の父と娘が歴史ロマンを楽しむハイキングにでかけた。

PROFILE
大舘洋志・実乃梨さん

奥多摩に住んでいたこともあり、写真とこの地域が大好きなフォトグラファー。現在、青梅駅近くで「フォトスタジオ青梅」という写真館を運営。七五三や振袖の記念写真など、人々の笑顔を生む写真撮影を日々、行う。

## OKUTAMA MUKASHI MICHI

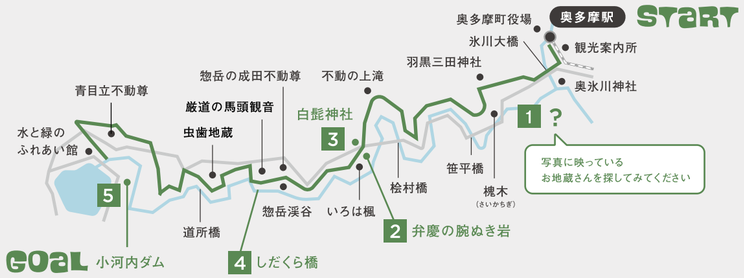
奥多摩駅付近から奥多摩湖まで、全長約10kmのコースは自然の癒しはもちろん、神社や昔の暮らしを感じることのできるスポットが点在し、ゆっくり歩くだけで奥多摩地域の歴史を感じることができる仕組みに。野生動物との遭遇、ダイナミックな自然、23の橋に廃線の遺構など、道中、次々と変化が訪れるのも人気の秘密。トイレも所々にあり、親子で安心してハイキングを楽しめる奥多摩きってのコースだ。

1. 点在するお地蔵さん

道中、お地蔵さんが点在していて、それぞれが恋愛成就や虫歯を治してくれるなど、とても優秀で個性的な印象!あるお地蔵さまを見た娘は「お父さんが早く酒を持ってこーい!と言っているところ」とコメント。どのお地蔵さまか是非探してみてください。

2. 弁慶の腕ぬき岩

腕が入るほど大きな穴のある天然石で、かの弁慶が腕を抜いた石として親しまれてきた。ここで腕を石に突っ込まない人は果たしているのであろうか。「私がくり抜いたことにしちゃおっか!?」(娘・談)とふざけた写真も撮れる素敵スポットだ。



3. 白髭神社の参道

白髭神社はむかし道の中でも重要なパワースポットのひとつで東京都の天然記念物にも指定される。石灰石の絶壁は岩壁自体が御神体だったようだが、とにかくその迫力がものすごい。巨大な岩の前にいるだけで我々、親子は確かにパワーをいただいた!

4. しだくらの吊り橋

一度に渡れるのが2名のみという、むかし道のクライマックス!当然、渡る時には揺れるし、多摩川が遥か下に見えるし、スリル満点で娘も大喜び。道中はこういう変化がたくさんあって、まるでアトラクションのように楽しめるコースです。

5. ゴールの奥多摩湖

坂道も多いし、猿も出たし、写真も撮りまくったしで、我々親子の疲労は結構、ピークに。そんな疲れをゴールである奥多摩湖のスコンと抜けた景色が癒やしてくれる。それにしても娘よ、よく歩いた!お父さんは君の成長を感じて、胸が熱いぞ。

2月中旬、来春から小学生になる娘と2人でむかし道ウォーキングに挑戦した。まず最初に訪れたのは羽黒三田神社。この階段は嘘みたいにずーーっと続く。笑うしかない。2人で「嘘でしょー」と連呼しながらひたすら登る。その後、野生の猿との遭遇も。娘にとっては生まれて初めての出会いだったので怖がるかと思いきや、カメラを手にうまく撮れないな、とか言いながらどんどん猿に近づいて行くのだ。親としては娘の勇気に笑みがこぼれる。

道中、買いだめしたお菓子を食べながら進んだが、休もうとした場所が奥多摩の自然文化100選にも選ばれている「境の清泉」だったのはツイていた。そこでは名産のわさびも栽培しており、奥多摩の伝統的な生活を感じたな。美味しいお水をいただきながら娘に水の味はどう?と感想を聞くと「甘すぎるくらいだよ」とか言っている。それは君、お菓子を食べてるからでしょ、と父は思ったのだが(笑)。

そうそう、面白いといえば道の途中にあるお地蔵さんの解説。恋愛成就の為には二股大根を備えて拝むべし、だとか、歯が痛いなら穴のあいた石を発見してお供えしてね、とかね。お地蔵さんゾーンを過ぎて上を見るとキラキラと何かが舞い降りている。神様だ!えっと一、お金持ちになれますように。とか適当にお願いごとをしてみた。お地蔵さんの所で感じたことを信じる者は救われるんだよ、きっと。神様だったって信じてみるよ。もしかしたら光に照らされた花粉かもしれないけどね。

娘にとって初めての吊り橋(しだくら橋)は同時に渡れるのが2人まで。この人数しか渡れないの?3人だと落ちるかもしれないってこと??それがリアルな恐怖感を演出していて揺れる吊り橋から見る多摩川はアトラクションそのものだったな。

奥多摩湖に到着してバスに乗り込んだ娘はすでに爆睡。頑張ったね、と寝顔を見ながら幼い娘と過ごしたプレシャスな歴史ウォークに、納得と満足を感じたわけである。





自然がいちばん濃いTOKYO

# 奥多摩町に暮らす

都心から約1時間半、東京最西端に位置する奥多摩町。近年、自然豊かなこの町に、移り住む人が増加中だ。自分らしい生き方を謳歌する移住者へのミニ・インタビュー。

File 12 畠田達也さん

「奥多摩に住みたい。16歳の時からそう考えていたんです」
神奈川県川崎市出身の畠田達也さんが奥多摩に移住したのは約7年前、26歳のとき。きっかけは、趣味のバイク。高校生の頃からツーリングで奥多摩へ訪れるたびに、山間の美しい風景に心惹かれたという。大学卒業後は、お隣の青梅市へ。「都市生活からいきなり奥多摩に移住するのはハードルが高く、一旦、河辺駅近くに住まいを借りました。八王子へ通勤し、週末はキャンプやツーリングで奥多摩に。奥多摩で過ごす時間がもっとほしいと、結婚を機に引っ越しました」。不動産屋で見つけた物件は、JR古里駅から徒歩5分、築20年の中古住宅。購入の際は、移住・定住応援補助金200万円を活用。水回りのリフォームをして入居した。

山間での生活に憧れていた畠田さんは、自然豊かな奥多摩ライフを満喫。畑やわさび田で作物を育てるほか、3年前には狩猟免許を取得。仲間と一緒に、知人の山に罠を仕掛け、時には野営をしながら猟に励む。狩猟道具にもこだわりがあり、近く、工房を兼ねた別荘を町内に構える予定だという。
「住まいとは別に自分の趣味をとことん追求したスペースを作って、そこに友人たちを招いたら理想だなと。鉄を打つところから、自分の道具を作ってみたいんです」

男のロマンが詰まった、いわば大人の秘密基地。山間に佇む20坪の小屋付き物件は、懇意にしている地元の人に紹介してもらったという、不動産情報には出てこないような秘蔵物件だそう。「奥多摩は人の繋がりが深い場所。猟の師匠、畑の師匠、わさびの師匠…。自分が思い描く暮らしを叶える上で、色々な師匠が身近にいるのがありがたい。これからも自然と親しみ、人との関わりを楽しみながら、自分の趣味を深めていきたいですね」

— Welcome to —

## OKUTAMA TOWN

### 東京の森林(もり)へ移住定住のススメ

都下での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。
住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

#### 移住・定住応援補助金

奥多摩町では、次代を担う若者等の定住を応援するため、定住を目的として住宅の購入・リフォーム等をした方に対して、事業費10万円以上で、事業費の1/2 以内、最大200万円の補助金を交付します。事業補助金の限度額200万円を超えて、次の条件に当てはまる場合は、町内で使える各々10万円ずつの商品券を上乗せして支給します。
1)奥多摩町内に所在する事業所等に事業を依頼した場合
2)壁、床等に地場木材(多摩産材)を10㎡以上使用した場合
◎年齢条件 以下の方を対象にしています。
●45歳以下の夫婦 ●18歳以下の子どもを持つ世帯
●35歳以下の方

#### その他

いなか暮らし支援住宅、空家バンク制度、安く家が借りられる町営若者住宅、多子家庭の助成制度など、ほかにも定住および子育てにまつわるさまざまな支援を行っています。

#### 住宅資金借入の利子補給

奥多摩町に定住を目的とした住宅の購入・リフォーム等をされた方に、金融機関などからの資金借入に対する利子補給を行っています。条件は、400万円以上の融資を受け、償還期間が10年以上であること。町内金融機関を利用する場合は、最大年額33万円まで補給します。給付期間は36カ月。
◎年齢条件 以下の方を対象にしています。
●45歳以下の夫婦 ●18歳以下の子どもを持つ世帯
●35歳以下の方

#### 子育て支援

子育てのしやすい町をめざし、町独自で15項目の子育て支援事業を行っています。入園・入学・進学等の支援や、保育料をはじめとした学校給食費、中学制服代、高校生通学定期代など、子育てを頑張っている方への負担を軽減するための助成があります。また、都の制度を拡充し、所得基準を超えた世帯にも医療費を全額助成します。

お問い合わせ:奥多摩町定住応援総合窓口 Tel.0428 83 2310 http://www.town.okutama.tokyo.jp

Edit : Yukiko Soda [miguel.] Miguel Utsunomiya [miguel.] Art direction: Atsushi Kodani Illustration: Toshiyuki Hirano
発行:東京都奥多摩町 https://www.town.okutama.tokyo.jp 編集&制作:株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguel@dg8.so-net.ne.jp http://www.miguel-web.info
2024年3月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。
COVER STORY / 今号の表紙には、巨大なイヌワシが奥多摩湖の上を舞う雄大なシーンを表現しました。イヌワシは1965年、種として国の天然記念物に指定されています。